

学環学府

東京大学大学院情報学環 学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies

情報学環の未来に向けて—新年特別増ページ号
Graduate School of The University of Tokyo

Number. 12

INTERVIEW

町並みをつくりだすような美しい風車を…

荒川忠一教授インタビュー

「オランダの風車、いいですよね。自然と人間の生活が融合している、そういう牧歌的な風景が…」

6年前、情報学環が設立する頃から風車の研究を始めた荒川先生。

“機械屋”の立場だけでなく、経済、デザインなど幅広い研究に発展させている風車の研究について聞いた。



Q ご研究についてお聞かせください。

長年、流体力学のシミュレーションの研究をしていますが、情報学環に流動教員になることがきっかけとなり、現在、風車の研究、メディアアートの研究に取り組んでいます。

風車については、情報学環の色々な分野の先生方との交流によって、経済シミュレーション、デザイン、その地域の風土にあったヴァナキュラー風車の提案など、新しい概念で風車を研究発展させることができるようになりました。その成果として、2003年東京のお台場に850kW大型風車が2基、東京臨海風力発電所として建設されました。東京らしい風車として、ライトアップを照明デザイナーの石井幹子さんをお願いして、緑と白色の非常に美しいものになっています。“東京にも風車がある”というメッセージを、羽田空港に離発着する飛行機、近くを通る人へ伝えることに成功しているんじゃないかな。風車も、ただエネルギーを作るだけの機械ではなく、その土地に溶け込むような、町並みをつくっていくようなデザイン性も重要なんですよね。

Q 日本における風車の状況は？

私が風車の研究を始めた2000年頃には、見向きもされず10万kW程度だったのが、現在は100万kW、原子力発電所1ユニット分相当になりました。今、政府の目標が2010年300万kWで、それを達成するための研究も行っています。私としては、持続社会を作るということで、2030年に3000万kWで自然エネルギー1/4、原子力1/4、化石燃料1/2とし、2100年には自然エネルギーと原子力でまかなうことを夢としているんですね。今後、持続社会をつくるために、自然エネルギーは必要だと思っています。未来永劫、化石燃料を使えるわけではないですから…。

Q 風力発電の難しさは？

現在、風車は山に建てることが多いのですが、日本は海に囲まれている国なので、今後は洋上が増えていくと思っています。そこで問題になるのが漁業権ですね、これを解決する

のは難しい。そこで、原子力発電所の沖合はどうかと提案しているところなんです。この付近は漁業権の問題は小さくなっているだろうし、数百万kWの配線があるので、比較的気軽につなぐこともできるはずですから。その他に言われているのが、風が吹かなければ電力が取れないから不安定だということです。その対応策を考える上で、24時間後に風力でどのくらい電力を得ることができるか？ という気象シミュレーションのプロジェクトも立ち上げています。気象予測に基づいた、風力発電予測です。

Q 研究について、今後の夢は？

風車をどんどん発展させますよ。“日本の風車、日本に設置する大型風車の極めつけはこれだ！” そういうのを作ろうと思っていますね、10メガワットのを。ヨーロッパは最大で5メガワットまでできましたが、それを超える直径が140mくらいの風車を炭素繊維で造りたい、洋上で。洋上プラントとしてその周りは波力発電をやり、その下では、海中でのバイオマス、ジャイアントケルプなどを成長させて、更にそれを化学的な処理をして燃料にする。そういう洋上総合プラントを作りたいですね。また、小型風車で、それぞれの家のシンボルになるものも作りたいですね、昔の風見鶏のような…。エネルギー的には少ないですが、環境教育として、それを持っていることがステイタスになるようになればいいなと思っています。マンションではできないから、実は私の家ではできないんですけどね(笑)。



お台場に建設された東京かざぐるま(東京臨海風力発電所、画像:電源開発協力)

TOPICS

「情報学環・福武ホール」を赤門横に建設



右より 西尾茂文副学長、小宮山宏総長、福武総一郎会長、花田達朗情報学環長



昨年12月12日に行われた記者会見にて

情報学環の学際的な教育研究への高い評価が得られ、さらなる支援へと発展した。ふたつには福武氏は東京大学名誉教授で著名な社会学者である福武直先生の遠縁にあたること。情報学環の一つのルーツである旧新聞研究所は福武直先生が活動された文学部社会学科と密接な協力関係にあり、大学院を同じ屋根の下で運営していた長い期間をもつてい

た。大学院情報学環は、福武総一郎氏(ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO)による16億5千万円の寄附に基づき、「情報学環・福武ホール」を2007年11月の竣工予定で建設する。これは東京大学創立130周年を記念する「東京大学基金」への寄附となり、国立大学法人化後初めて個人からの寄附で東京大学に建物が建設される。

建物の寄附に至るご縁は、ひとつに2004年4月に設置された「ベネッセ先端教育技術講座」の活動を通じて、ベネッセから

情報学環の誕生にあたり、旧新聞研究所を前身とする社会情報研究所との統合など組織面も含めて幅広い「学際研究」の拠点として生まれたことに福武氏は強く共感された。

建物の設計は安藤忠雄氏による。安藤氏は福武氏が香川県の直島に開設された地中美術館の設計もされた。「情報学環・福武ホール」は、安藤氏が東京大学において設計される初めての建築物となる。地上2階、地下2階の低層で、3750mの延床面積の3分の2を地下に埋めるなど、本郷キャンパスの景観や環境に配慮したものになっている。

「情報学環・福武ホール」内には先端教育技術研究センター(仮称)が新設される。これは、産学共同で高度の教育技術を研究開発し、それを最先端の教育施設に応用していくという、日本初の試みとなり、完成すれば、米国のMITやスタンフォード大学の類似施設を凌ぐ世界一の施設となる。情報学環は、東京大学が全学で取り組んでいる教育環境改善プロジェクトTREE (Todai Redesigning Educational Environment:東京大学教育環境リデザインプロジェクト)とも連携しながら、未来の教育の形を現実のものにするための研究開発を進めていく予定だ。

昨年12月12日には福武会長、小宮山総長、西尾副学長、花田学環長が出席して記者会見が行われた。その場で小宮山総長はこの寄附建物を「未来情報学習館」と特付付けた。



建築家・安藤忠雄氏による「情報学環・福武ホール」スケッチ

総合分析情報学コース誕生

大学院情報学環・学際情報学府に新しく「総合分析情報学コース」が、本年4月1日に開設される。このコースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの知識を基に、センサーや観測衛星等から取得された大量のデジタル情報を実社会において有効に活用できるように、分析、解析する分析情報学の学際的な研究、高度な専門教育を行う。具体的には、次のような研究が挙げられる。

- コンピュータネットワーク上の各種断片情報の集合からコンピュータネットワークシステムの脆弱性や防衛策を明らかにする
- 合成開口レーダー衛星等の観測衛星から得られる膨大なデジタル情報の解析し、災害予知や復旧に役立てる
- GPS衛星から取得されたデジタル情報や、国土に設置されたビーコンやRFIDなどの情報を利用して、視覚障害者や外国人のように情報バリアがある人にナビゲーションを行う(自律移動支援技術)
- 食品にRFIDを取り付け、その生産・流通・販売段階の取り扱いをモニタリングして得た膨大な情報から、食品事故発生時に原因を特定する(食品トレーサビリティ)
- 膨大な実世界デジタル情報をリアルタイムに全世界に流通させるための、地球規模のコンピュータネットワーク基盤を構築する



このように現実社会に深く関わる技術課題、それを支える社会制度までも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学、計算機科学の研究者を育成する。

日韓学生交流の制度化に着手

— 毎年恒例東京大学・ソウル大学合同シンポジウムを終えて —

昨年10月28日(金)29日(土)の両日、本郷の学生会分館および学環暫定アネックスに於いて韓国ソウル大学校社会科学部大学言論情報学科の教員と学生、合計12人を迎えて、毎年恒例の合同シンポジウムを開催した。



覚書を取交わすKang Myung-koo(ソウル大学言語情報学科教授・学科長(右))と花田達朗情報学環長(左)

「日韓 情報メディア社会の諸相」というタイトルの今年のシンポジウムでは、両校の教員計8人が研究成果を発表し、討議した。さらに、今年度のハイライトは、両校が正式に学生交流協定を取り交わし、授業料免除や単位互換制を含む本格的な交換留学制度の整備に合意したことである。

この合同シンポジウムは、社会情報研究所時代から、すでに約10年間、毎年ソウルと東京で交互に開催されてきた。今では両大学の教員たちは旧交を温め合う仲となっているが、一昨年より、学生の交流を目的とした学生合同シンポジウムもスタート。今年度も、29日に第二回が開催され、参加した学生たちは活発な討論と交流の場をもった。シンポジウムに先立って、ソウル大学と東京大学との間をインターネット回線で結んだ日韓合同の大学院授業も始動しており、両校の絆はますます深まっている。学環・学府の研究・教育両面の国際化が着実に整備される中、学生たちも、こうした制度を大いに利用して、積極的に研究の国際化を進めてほしい。

FEATURE

「学環は、タフでなければやっていけない」

学環の研究・教育の反省と展望

—原洋之介教授、廣井脩教授、馬場章教授、鈴木高宏助教授をお迎えして

座談会

【鈴木：山と谷が毎日押し寄せてきて】

林(司会) 今日は来年の干支、戌年の原先生、廣井先生、馬場先生、鈴木先生、そして来年ご退任なされる原先生の4人をお招きしました。まずは、先生方それぞれの今年の研究の「山」と「谷」についてお伺いします。



原洋之介 教授

原 山も谷も感じるほどの歳ではなくなってきました(笑)。今、ODA戦略会議に関わっており、東南アジアのラオスに日本がこれからどうい協力をするかというレポートを作っています。ラオスには、大学の研究機関のようなものがないところで、どのような学術協力ができるかが一つの課題となっています。もう一つは、現在の世界経済と東アジアの経済がどのように動いているかをまとめた『東アジア経済戦略』(NTT出版)を最近書きました。そして、経済学の枠組みの中で情報という概念を取り入れた場合、今までの経済学がどのように変わるのか、というエッセイも書き始めています。



廣井脩 教授

鈴木 私は、山と谷が毎日押し寄せてきて、どちらが山か谷かわからなくなっているようです。今年は、うちの研究室にやっと学生が充実し始めています。一番大きいのは、流動元の生産技術研究所で、この春からITS(高度道路交通システム Intelligent Transport System)の研究センターを立ち上げて、その幹事役をやらせていただいています。また研究では、やわらかいロボットシステムを作ることが第一のテーマとしてあります。谷は、今まで、人から頼まれた仕事を基本的にNOとはいわずにやってきましたが、今年は忙しくていくつかが断ってしまった、これは私には大きな谷でした。

廣井 私は、このところ体調を崩しておりまして、みなさんに大変ご迷惑をおかけしていることを、まずはお詫びします。昨年は、大変災害が多い年でした。観測上初めて10個の台風が日本に上陸し、しかもほとんどが甚大な被害を与えた。極めつけは、新潟県の中越地震。これらの調査に追われて1年を過ごしました。この間に災害時の高齢者への対策が進みましたが、その一

役を担えたかな、というのが山といえば山です。ただ、防災研究というのは、体力が勝負です。とにかく、水もない、道路はめちゃくちゃ、電気も通ってないというところで仕事をするわけですから。情けない話ですが、いまは他大学で教授や助教授になっている元学生たちに動いてもらっています。それが残念なことですね。

馬場 教育、研究に関していうと、2005年3月までは史料編纂所からの流動(注*)という立場でしたが、4月からは情報学環の基幹(注*)になり非常に大きく変わりました。今まで考えていたけれどもやれなかったことが、大いにやれるようになりました。また、昨年度から続けていることですが、情報学環のコアプロジェクトである21世紀COEと、科学技術振興調整費のコンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、その両方に携わっています。山と谷は、自分でもよくわからなくて、おそらく1日のうちそれを何回も繰り返して忙しく過ごしているんだと思います。COEもコンテンツも2年目を迎えて社会的な認知度が高まり、いろんなところで発言を求められ、自分の研究の重み、社会に与えている重みを実感しはじめたところです。

【馬場：学環は、基礎研究、応用研究、両方の存在が認められている組織】

林 先生方、多彩にご研究なさっているのですが、皆さんそれぞれ社会と強い絆をもつご研究をなさっていらっしゃるんですね。学環の研究の社会的責任という点について、お考えを伺えますでしょうか。

原 社会と大学との関わりというのは決定的に重要だと思いますが、いろんな局面があると思います。例えば自分の専門で言えば、ODA戦略で政府と学者の間で齟齬が出てくる。たとえば、ぼくらは無駄な橋とか作ったって仕方ないかと思うことなんかがあるわけです。社会に対して関わっていくことは重要だと思いますが、同時に冷めた目で接する部分もあるはずで、そのバランスをどうとるかだと思います。また、組織全体から見たバランスと、個人レベルでのバランスも考えなければなりません。社会にぐっと入った部分と少し引いた長期的なもの、そういうバランスが両方の局面で重要ではないかな。流動というシステムなんかもうまく利用して、「基礎研究」と「応用研究」のバランスをとる。そういう仕掛けを考えていかないといけない。

廣井 基本的には、学部や大学院は、知的好奇心に支えられた

基礎研究。研究所は、もう少し社会との接点をもった応用研究というのが一般的な分け方でしょう。ただ、社会科学という立場から言えば、私は、1980年にOECDが出した「日本の社会科学を批判する」という翻訳本のなかで、日本の社会科学が手厳しく批判されていたことを思い出します。日本の社会科学は、外国の物まねである、輸入学問である、そしてまた、現実の社会問題を解決できないというのです。基礎研究をしている人が情報学環にいても決しておかしくありませんが、理学部系が非常に少なく、工学部系が多いことも考えると、組織のアイデンティティとしては、やっぱり応用研究のほうに重点を置いたほうがいいのかと感じたりしています。

馬場 私は、結論を言ってしまうと、バランスをとるのが大事だと思います。今の情報学環は、基礎研究、応用研究、両方の存在が認められている組織であって、しかもプロジェクトという形で接点ができる、そういうメリットがあると思います。さらに、流動という形で教員が交代することは情報学環の刺激となって、新しい接点を生み出すこともあるんじゃないかと思っています。たとえば、池内克史先生は、デジタルアーカイブの技術的なことをやっていて、私はその中身の部分をやってきたわけですが、このような接点は情報学環で始めて生まれたんですね。今は、デジタルアーカイブで共同研究のプロジェクトをやっています。そういうところが情報学環の良い所じゃないかな。

【原：文理融合については、特に若い先生は非常に難しい状況に置かれているのではないかな】

鈴木 ただ、技術として確立したものをもったシニアな先生だと、そのようなジョイントが比較的うまくいくと思いますが、逆に助教授クラスの若手の流動メンバーにとっては、何か目に見えるものを残していくことができるかは少し疑問です。理数系のコースでは、しばしば問題に挙げられているところです。

原 情報学環がミッションとしている文理融合については、特に若い先生は非常に難しい状況に置かれているのではないかなと思っています。たとえば残念ながら私が関係してきた経済学のメイン・ストリームでは、他の領域とインターディシプリンなことやっていたら、学会で認められないんです。専門雑誌に何本論文投稿したか、それには、ある作法に沿った論文を書かないといけな。そうしないと、簡単に言えば学会で認められない。このあたりが、僕、非常に難しい問題かなという気がしています。ある年齢に達してきて、それなりに認められていけば、いろんな領域に越境していても、やりやすいと思うんですよ。だけど、若い時代にそれすると、損するんですよ、乱暴な日本語使うとね。

【廣井：今の学生は、あまりも手取り足取り】

廣井 問題は採用人事。アイデアとか発想の斬新性のようなものを認めていまは荒っぽいけど、鍛えればものになるんじゃないかという人も人事で採用する仕組みを考えたほうがいい。

原 大学院くらいで、良い論文、認められる論文を書こうと思ったら、あんまり遊びが入ったら困るんです。ということは、光の当たっている特殊な分野を、ぐっと時間をかけてやらないと、論

文が書けなくなるんです。ですから、そこが、非常に難しくってね。インターディシナリーということは、重要だと思うんですけどね。いわゆる専門への自信に裏付けられた越境への意気込みが必要となるでしょう。今の若い世代にそのキャパシティーがあるか？ 僕はそこがものすごく気になるんですよ。

鈴木 タフでなければいけないところが、やはり年々難しくなってきたと思います。こちらから言うまでやらない、受身な学生は少なくともダメですね。何を求めるにしても自分からアクティブにモチベーションをもってやる学生であるというのは、少なくとも欲しいところですね。

廣井 今の学生は、あまりも手取り足取りという気がしませんか？もう少し、主体性を大事にするような、自立させるような仕組みが必要かなとも思う。

林 学際情報学府の学生さんはとくにアクティブであってほしいということですね。主体性がないと、情報学環の良い所を受けとめられないままに、3年ぐらいいつという間に過ぎてしまうということになりかねない。これは教員と学生、皆の課題かもしれないですね。

*注 「流動」「基幹」：情報学環は、学環専属の「基幹教員」とともに、他の部局に属する教員が一定期間出向して研究と教育を行なう「流動教員」というシステムを持っている。これによって、柔軟性のある学際的研究を保障する体制を維持している。



馬場章 教授



鈴木高宏 助教授



林香里 助教授

座談会を終えて（林香里）

研究もお人柄もそれぞれにとってもユニークな4人の先生をお迎えして行なった座談会。1時間はあっという間に過ぎてしまいました。短い時間に、「基礎研究と応用研究」、「専門性と学際性」、そして「文系と理系」という現代の学問の基軸をめぐる議論がいつべんに飛び出しました。学環・学府という場は、そういう学問世界の対抗軸を組織設計のなかにすべてひっくるめて引き受けて、それらをうまく調和させていこうとする一大実験室と言えるのでしょうか。このような組織のデザインは、先例もないので、研究や教育にどのように活用するかは、私たち教員と学生一人ひとりの腕と度胸とスタミナにかかっていると思います。来年もまた一年、学環・学府に在籍する私たちは、次々と押し寄せるさまざまな課題に取り組んで、決して退屈することなく研究の日々を送るのではないかと実感しました。

(2005年11月18日、情報学環1階会議室にて)

PROJECT

知能住宅センシングルームプロジェクト

東京大学大学院情報学環 助教授 森 武俊

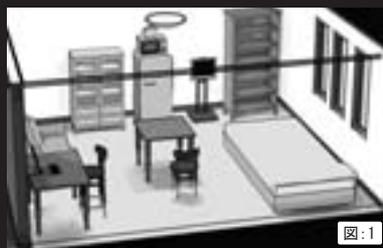


図:1

本プロジェクトでは、住まいは人が個人生活を営む場で、そこでの活動を計測してその人に合わせた支援をする技術ができれば、快適で安心・安全な暮らしに

つながると考えて研究を行っています。室内での生活の様子を長い期間計測・蓄積し、システムが行動についていわば学ぶことができます。その時その場に適切な手助けが可能になると考えているのです。パーベイシブコンピューティング技術、センサネットワーク技術、ネットワークロボティクス技術、そしてもちろんIT技術全体の進展により、このような知能住宅の実現が可能になりつつあります。

センシングルーム

部屋は、キッチン、リビング、寝室というようにあるまとまった機能を持っていることが多く、住む人は長い間その家で生活することになるので、個人個人の長期的な傾向にもとづいた支援がさまざま考えられ、またそれが求められる環境です。

センシングルームは、日常生活を計測・蓄積する部屋型システムとして構築している図1のようなイメージを持って造っているアパートタイプの模擬生活居住空間です。できる限りふだんの生活はそのままということをコンセプトに、人に何らかの特別な機器を装着することはせずセンサを環境側に埋め込んで計測します。

人は必ず重力を受けて生活しています。そこで、床やベッド、椅子などに圧力センサを分布させ人の位置や向きを測ります。また、家具や電気製品に、開閉センサや電流センサなどの利用状況をつかめるセンサを付けます。人の位置情報と家具などの利用状況を統合して解釈することで、図2のような室内での行動の様子が図3のように推定できるのです。

図4で表しているように、センサは全部で500以上あります。図4左上はベッドの敷布団の下に敷きつめた圧力センサ、中央下は床センサの情報を示しています。中央上の黒い部分は無線タグ(いわゆるRFIDタグ)の受信機の位置を示しています。無線タグを付けた物がそばに来るとその物体の簡易モデルが表示されます。このようにして、人がその部屋のどこにいて、何をしているかを計測し蓄積することができます。



図:2



図:3



図:4

生活パターンに合わせてサポート

少子高齢化へと社会が変化するなか、独り暮らしをするお年寄りの数は、今後増加の一途をたどると予想されます。バリアフリー、ケアサービスが進みつつあるとはいえ、独り暮らしは不安や危険と隣合わせです。住まいで人を見守るサービスを実現するには、人にかわって生活の変遷をとらえ、生活の異変に気づくような技術が必要だと考えられます。

センシングルームの研究では、生活データのパターン解析、特にクラスタリングをその中核と位置づけています。例えば、実際にある生活データについて、ある時間幅に区切ったデータ同士の類似度をもとにクラスタリングすると、生活がおおまかに5つのパターンから構成されるということが自動的に解析できました。このように生活のパターン分類がつかめると、逆にそこからはずれたデータが観測された場合には、ある異変が起きている、さらには事前に異変が起きそうだということも推測できるのです。

健康生活の支援だけでなく、図5のような天井に取り付けた部屋のどこにでも映像を投影できる可動プロジェクトで「冷たい飲み物が冷えていますよ」と図6のような足下への情報提示を行う支援など、便利な新スタイル生活についても考えています。



図:5



図:6

クリエイティブで安心感の持てる生活へ

センシングルームのような研究が進めば、例えば家庭での健康状態をいつも蓄積しておくこともできます。病院にいくときにそれを持参できれば、ふつうは病気のときの様子しか分からない医師も日々の健康なときの様子や生活習慣などをつかめます。治療中心の医療から患者と医師が協力する予防的健康支援医療へとという

広がりも期待できるのです。人の個人生活のデータは、最も重要なものだけに、その取り扱い方法には十分な注意がいります。それだけ大切な情報であるがゆえ、もし適切に活用することができれば、人にとって快適で安心で安全な生活を提供する鍵となる技術なのです。

【参考】(1) <http://www.ics.t.u-tokyo.ac.jp/>
(2) <http://www.nikkeibp.jp/sj2005/interview/20/>

NEWS

卒業生との交流
「ホームカミングデイ」

昨年度より東京大学が全学の行事として始めた「ホームカミングデイ」が、昨年11月19日に開催。情報学環では、プロジェクト紹介、パネルディスカッションを行った。卒業生を母校に招き、旧交をあたため、さらに現役の院生との新しい交流の場でもあるこの催しに30名ほどが集まった。

パネルディスカッションでは、旧社会情報研究所卒業の孫盛林氏(人民日報東京特派員)、松田美佐氏(中央大学文学部助教授)、情報学環卒業の高橋輝子氏(千葉県庁)、情報学環博士課程3年の松村誠一郎氏が登壇。各方面で活躍している4名が、「智慧の環・学びの府・社情研、学環・学府の来し方行く末」をテーマに、学環・学府の課題、卒業生との交流などについて語った。

「学際情報学環・情報学環、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」制作展
[iii exhibition 4]開催

昨年12月1日(木)から12月3日(土)にかけて工学部2号館展示室にて学生による「iii exhibition 4」が開催

された。これまで本制作展の企画・運営は授業の一環として学生主体で行ってきたが、4回目となる今回は東京芸術大学卒業美術博士で現在メディアアーティストとして活躍されている鈴木太朗助手を総合プロデューサーとして迎え指導いただいた。メディア・アートから映像まで幅広い個々の作品を含め展示会全体として「魅せる」という点において大変レベルの高いものと好評だった。今回は今年7月頃開催予定。詳細 <https://www.iii.u-tokyo.ac.jp/i3e4/iii4.html> (鹿川耕治郎・M1荒川研)

フリーランス・フェスティバル
開催

昨年12月10日弥生講堂一条ホールにて、情報学環、アジアプレス・インターナショナル、日本ビジュアル・ジャーナリスト協会、DAYS JAPANが主催で、フリーランス・フェスティバルが開催された。日本及び世界各地で活動する独立系ジャーナリストたちが一堂に会し、「会社ジャーナリズム」とは一線を画す独立系ジャーナリズムの課題、可能性を提言、日本のジャーナリズムのあり方について議論した。参加者300名以上、立ち見が出るほどだった。

「戦争とメディア研究会」
講演会開催

吉見俊哉研究室が主催する「戦争とメディア」研究会が、昨年10月、11月に講演会を開催した。10月27日の講演会では、「戦争の記憶をめぐる国際共同アーカイブの提案」と題し、カルフォルニア大学サンタクルス校のアラン・クリスティ准教授に、戦跡のデジタル画像(特殊な360度全方位撮影カメラを用いて撮影)と記憶の問題を結び付ける実験についてお話し頂いた。11月17日の講演会では、島根県立大学の貴志俊彦助教授に「満州国のグラフィズムと宣伝一板祐生コレクションをもとに」と題するお話しをして頂いた。貴志氏に関するプロジェクトと、当研究室が進める戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブプロジェクトとの連携について協議を進めることができた。

富士正人 学務係長
永年勤続表彰

平成17年度東京大学教職員永年勤続者表彰式が昨年11月22日に行われ、学務係長富士さんが表彰された。「勤続20年の表彰状をいただきました。お祝いいただいた方に、ここで改めて御礼申し上げます。私が初めて東京大学に勤務した頃は、ワープロが事務室に1台しかありませんでした。それが、今や個人用パソコンでメールの洪水状態。はたして今後は事務室がどのように変わのでしょうか…」と富士さんは、自身の歩みと事務室の変容を重ね話した。

教育部研究生募集

情報学環では、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズム分野で活動することを志す者、マス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらに学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を対象に教育指導を行っている。主な授業科目には、社会情報学基礎、文化人間情報学基礎、学際理数情報学基礎、実践マス・メディア論、実践情報社会論などがある。修業年限は2年、修了に必要な単位を修得した者には、修了証書を授与している。

受入予定人員：50名

出願：平成18年1月30日～2月3日

筆記試験：平成18年2月15日

面接試験：平成18年3月1日

(筆記試験合格者に対して行う)

詳細

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

コンテンツ創造科学
産学連携プログラム履修生募集

本プログラムでは、先端的デジタル技術を活用し、国際競争力を有するコンテンツ産業を担う世界的水準の人材育成を行っている。育成する人材は、先端技術と国際的なコンテンツビジネスの高度な専門知識を有し、実社会で研究成果を活用できる「プロデューサー」、表現手法に詳しく、エンターテインメント技術の世界的水準の技術開発をクリエイターと共に進める「技術開発者」、以上の人材に関する「指導的教育者」。

受入予定人員：40名

出願：平成18年2月6日～2月10日

選抜：一次(書類選考)、二次(筆記・口述)

詳細

<http://content.iii.u-tokyo.ac.jp/>

人事異動・着任教員自己紹介 人事異動 2005.11.1

配置換

澤田康文 教授(大学院薬学系研究科より)

採用

山田和明 科学技術振興特任講師
佐藤洋一 助教授(生産技術研究所より)

澤田康文 教授

本学大学院薬学系から11月1日付で学環流動教員として赴任してまいりました澤田康文でございます。これまで、一貫して医薬品の適正な使用法と育薬に関する教育研究を行って参りました。国民の安心・安全を確保するために、医療消費者と医療従事者との情報交換から新たな情報を作りだし、それを提供する、全国ネットワークシステムの構築を目指しております。とは言っても私のコアコンピタンスは医薬品情報コンテンツの創製ですので、使い勝手のいいプラットフォームや最先端のインフラについては先生方のご協力が必要です。どうか宜しくお願い致します。

薬学系研究科医薬品情報学講座 <http://www.f.u-tokyo.ac.jp/druginfo/index.html>



佐藤洋一 助教授

11月1日付で生産技術研究所から情報学環に参りました佐藤洋一と申します。コンピュータビジョンを専門としておりまして、最近では画像センシング情報をもとにした実世界における人間の行動の計測と理解に関する研究などを進めております。生産技術研究所では理工学における諸分野の融合という観点から研究に取り組んで参りましたが、こうして今回情報学環に加えていただけたことで、理工学系だけでなく文科系との融合へと研究領域の幅を広げていきたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



BOOKS

「東アジア経済戦略
文明の中の経済という視点から」

原洋之介著/NTT出版

現在わが国政府がすすめている東アジアとの経済連携という構想には、どんな問題点があるかを、市場経済の地域的な多様性という視点から論じた、やや政策論的論考である。(原洋之介)

「多元化する「能力」と日本社会」

本田由紀著/NTT出版



近年、「人間力」と呼ばれるような不定形の能力を強調する言説が著しく増加するとともに、実際にそうした能力が様々な「社会的地位」の規定要因として重要化しています。この本では、このような現実をデータに基づいて浮き彫りにし、かつそうした状況からの脱出口のありかを探ろうとしています。(本田由紀)

発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 ● 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 ● e-mail: news@iij.u-tokyo.ac.jp ● URL: http://www.iij.u-tokyo.ac.jp

Computer Images by Yoichiro Kawaguchi
編集委員: 荒川忠一(委員長)・林香里・稲葉理恵
発行: 2006年1月